

—編集後記—

この春は、桜（ソメイヨシノ）の開花の最早記録が全国各地で塗り替えられました。私が住むつくばでも、まだ4月にもなっていないというのに、雨の日の夜、自転車で帰宅途中で蛙の大合唱に遭遇したり、私が四半世紀管理する農環研の畑圃場では、秋播き小麦が今にも出穂しようとしていたり、こんなことは、私が此処に来た90年代後半には到底考えられなかったことであり、身近な生態系が未曾有の環境変化に応答して否応なくもダイナミックに変化するさまに、只々驚いています。

本誌142号から147号までの2年間、編集委員長を担当しました。この間、大幅な遅延が生じた号もあり、皆様には大変ご迷惑・ご心配をおかけしましたが、編集幹事、編集委員、査読者は勿論、多くの皆様のご協力・ご尽力により、何とか任期を全うすることが出来ました。この場を借りて、深くお礼を申し上げます。

今期、幾つか新しい記録を作りました。まず編集事務局の話が来たときすぐ、編集幹事の朝田さんや研究室のメンバーとも相談して決意したのですが、表紙写真枠を従来面積の3～4倍に拡張しました。各著者のご好意により写真素材をご提供いただき、「土壌物理に興味のない人でもつい手に取って中を見たくなるような魅力ある表紙とは一体どういうものだろう？」と考えながら、研究内容の紹介写真ではなくデザインとしての表紙写真を

目指しました。複数の写真素材を並べるとき、各素材が持つ情報量は一定なのに、ただ配置を変えるだけで見た目の印象が全然違うのは何故？と思いながら、デザインの奥深さ（基本？）を少し垣間見たような気分には浸れたのは、個人的にとっても新鮮で貴重な経験でした。なお写真の枚数は多い時で5枚（144号）となり、従来の最高記録4枚（123号）を塗り替えたようです。次に、編集委員の人数（15名）は、仕事を広く浅く分担するため、従来の最多記録14名（2009～2010年度）を確認した上で、じわりと記録更新しました。更に、全く意図せず実現した嬉しい記録は、初の英語の「土粒子」です（144号、慣例的に論文賞受賞者に執筆依頼）。英語論文は以前から掲載しており、たまには、英語の巻頭言や編集後記があっても良いのかな（読んでみたい）とも思います。

会員数の減少がどの学会でも問題となる中、コロナ禍によって最早普通になったオンラインの学会開催なども含め、学会のありようは、今後さらに急速に変化していくのだと思います。しかし学会の本質は何も変わらないでしょう。独立した個々の研究者が持つ感覚・主観が集まったときに生み出される斥力や引力が学会を動かす原動力であり、今後もその中の一人として、皆様との相互作用によりダイナミックに変化していきたいと思えます。

江口定夫（編集委員長）

土壌物理学会

事務局構成	会 長	足立 泰久	筑波大学 生命環境系	
	副 会 長	小林 政広	森林研究・整備機構 森林総合研究所	
	事務局長	山下 祐司	筑波大学 生命環境系	
	庶務幹事	小島 悠揮	岐阜大学 工学部	
	編集幹事	朝田 景	農研機構 農業環境変動研究センター	
	会計幹事	西脇 淳子	茨城大学 農学部	
	会計監査	岩田 幸良	農研機構 農村工学研究部門	
		西田 和弘	農研機構 農村工学研究部門	
	編集委員会	委 員 長	江口 定夫	農研機構 農業環境変動研究センター
		委 員	赤羽 幾子	農研機構 農業環境変動研究センター
飯山 一平			宇都宮大学 農学部	
片柳 薫子			農研機構 農業環境変動研究センター	
久保田富次郎			農研機構 農村工学研究部門	
小林 幹佳			筑波大学大学院 生命環境科学研究科	
佐野 修司			摂南大学 農学部	
鈴木 克拓			農研機構 中央農業研究センター（北陸研究拠点）	
高橋 智紀			農研機構 東北農業研究センター（大仙研究拠点）	
釣田 竜也			森林研究・整備機構 森林総合研究所	
常田 岳志			農研機構 農業環境変動研究センター	
橋本 洋平			東京農工大学大学院 農学研究院	
深田 耕太郎			島根大学 生物資源科学部	
瀧山 律子	農研機構 九州沖縄農業研究センター			
百瀬 年彦	石川県立大学 生物資源環境学部			
渡辺 晋生	三重大学大学院 生物資源学研究科			